

創立 146 周年記念式典 式辞

2025 年 12 月 1 日（月）会場 活水中学高等学校

創立記念日に当たり「知恵と生命（いのち）との泉―主イエス・キリスト―に掬べよ」。エリザベス・ラッセル宣教師のこの言葉を学院に連なる生徒学生教職員、そしてご来賓の皆様がた一同で、新しい気持ちで噛みしめたいと思います。ラッセル宣教師が活水と命名したのはただいま読まれたヨハネによる福音書第 4 章の箇所です。

シカルというサマリアの町にイエスや弟子たちは二日間滞在します。その町には井戸があり、この井戸を囲んでイエスとサマリアの女との会話から第 4 章は始まります。

冒頭にはイエスへのサマリアの女の言葉が紹介されます。よく知っているように、サマリア人の特異性、民族や宗教、また歴史的な正当性を盾に、水を飲みたいというイエスに反感を抱く彼女の言葉は政治、経済、民族的対立などに発する現代の各地の戦争や紛争にも共通するものです。

イエスが「この水を飲む者はだれでもまた渴く。しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渴かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」（4：14）の返答は私たちにも奇異な気持ちを抱かせます。サマリアの女のイエスの言葉への態度に変化が現れるのはその後でした。この女は他人には隠しておきたい、知られたくないとても不幸な家庭生活をイエスが知っていたことから会話は急転回します。

「永遠の命に至る水がわき出る」についてイエスは語り続けます。その一つは将来神さまを礼拝する場所と時についてです。場所とは地理的な場所ではなく、霊と真理で礼拝をするところであり、その時とは霊と真理で神さまを礼拝する時なのです。「今がその時である」とイエスは断言しました。

サマリアの女にイエスは自分が「キリストと呼ばれるメシアである」と明かします。弟子にさえ、例えばペテロにさえ自分がメシアであることを誰にも話さないようにと釘を刺していたこと（マルコ 8：30）を思いだすと、イエスがメシアであると公言したことは驚きです。

イエスは食べ物、収穫の実りについて話を続けます。『一人が種を蒔き、別の人が刈り入れる』ということわざを例にして、「あなたがたが自分では労苦しなかったものを刈り入れるために、わたしはあなたがたを遣わした。他の人々が労苦し、あなたがたはその労苦の実りにあずかっている。」（ヨハネ 4:38）

この第 4 章の箇所は創立記念日に相応しい箇所であると思います。十分な報酬を受けないまま種を蒔くのに苦労した人がおり、別の人が成長した実を刈り取る。私たちはその労苦の実に預かっている。つまり恵みの下（もと）にいるのが私たちだということです。

別紙で配られた永眠者の名簿も皆さんに配られています。先ほどは素晴らしい永眠者を追悼する吹奏楽の音楽がなされ感動をいたしました。特に今年は戦争終結 80 年目に当たり、卒業年が 1930 年から 40 年代の方にどうしても目が行きます。この時代に在学しておられた方でこの名簿にはない、既に亡くなられ、また原爆の被害にあった方が大勢いらっしゃるでしょう。

活水学院の宣教師は真珠湾攻撃の半年前にはすべて国外退去を命じられ帰国しました。これから歌う校歌を作曲したオリーブ・カーリー宣教師は命令に従わず、それでも長崎にのこりましたが 1941 年 9 月に長崎を去りました。米国からの支援も途絶え、教職員の給与を払えない数年間が 1940 年代の前半の活水学院でした。永眠者の 20 数人はこの年代に生徒・学生として在学した方々です。

この時代の生徒、学生、教職員はまさに苦勞しつつ活水の種を蒔き続けた人々です。

1945 年 9 月に家政科を卒業された大賀寿子(ヒサコ)さんの手記をご紹介します。(抜粋)

「宣教師が帰国を強いられた 1930 年代の前までは世の中も平和でした。入学して 3 年後には太平洋戦争がはじまり、乙女の夢は次第に崩れていきました。卒業は終戦の 9 月 30 日です。その間衣食住に貧困を強いられ、心には耐えることのみを良として過ごしました。この期間は活水が創立以来の受難時代であったと思います。1943 年に入り夏休み以降は勤勞奉仕や香焼の川南造船所へ動員となり授業も次第に少なくなりました。その後さらに戦時体制が強化され、特にキリスト教主義学校には風当たりが激しくなり、制服を着て通学しているのに星条旗の星をつけているのは非国民だ、セーラーの星を取れとか、活水はスパイだろうなど、電車の中や浜の町の人ごみの中で随分言われました。女子専門部の人も服装を目の敵にされ、世間から大変冷たい目で見られ、辛い思いをされていました。勤勞報国体の配置も危険の多い香焼にやられ、船で毎日往復する途中、機銃掃射されそうで、命がけの通勤でした。

学校の方でも風当あたりが緩和されるように朝の礼拝のあと、「海行かば」を歌うようにされました。体育館脇の崖に防空壕を提供したり、食料増産に協力し、他校に先駆けて国策に沿う様、努力をしていたことが私たち生徒にもわかりました。

当時の武藤健校長は礼拝の際に最敬礼、宮城遥拝(きゅうじょうようはい)。そしてその後の、黙とうと「海行かば」の間に、讃美歌、聖書、祈り、讃美歌、黙とうを挟むようになさいました。

終戦後に米軍が長崎に入る前には、武藤校長は生徒や職員は絶対に米兵から守ると言いきり学内の不安や動揺もなくなりました。先生が米国で学んだ経験があること、そして先生の不動の信仰がこの勇気ある決断となったと思います。しかし、戦後、軍国主義でキリスト教教育に反した教師として密告をされ、「他の教員に累を及ぼさない」という条件で公職追放をお受けになり長崎を去りました。活水の受難時代を思うとき、活水を守ってくださった

武藤先生のことを忘れることはできません」

そして私たちは成長した実を刈り取る恵みの下にいるのです。活水創立者から始まり、その後の 146 年間に今紹介した大賀寿子さんを含め、活水学院に係わった生徒学生教職員の方がた一人ひとりが、どれほどの苦勞をして蒔いた種だったのかを思い出さねば、その実を刈り取る今の私たちにはその祝福の尊さに気が付かないことになるでしょう。

「知恵と生命（いのち）との泉—主イエス・キリスト—に掬べよ」は生きている者だけのものではありません。「今がその時である」とは、過去から連続して続く永遠の時の中の今なのです。

聖書によれば「命の水の泉」はこの世で生きる私たちのためのものだけでなく、召天され天にある人々のための活ける命の泉です。神さまはこの人々を導き、その苦勞の涙をことごとく拭いられました。創立者のラッセル先生が「生命」をいのちと呼んでいることは、命の泉が単に現世だけでなく、この世の務めを終えた人にもイエスが約束され、現にその祝福のなかにいることを教えています。

朽ちる知識ではなく知恵、朽ちる生命ではなくいのちの泉、活水学院のモットー「知恵といのちの泉」こそ、活水の「建学の精神」の最も活水らしい点です。教育方針だけでなく壮大な神の計画を指しているからです。

活水は 146 年間、死を超えた永遠の命に至る希望を語り、そして祈ってきました。その希望の約束を象徴的でなく目の前にある「いのちの水」として喉の渇きをもっていただき、活かしていかなければなりません。

感謝しつつ、今年の創立記念礼拝を喜びのうちにむかえたいと思います。

院長・理事長 湯口隆司